

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02115

研究課題名（和文）エゴ・ドキュメントを使った「戦後労働社会」形成の歴史研究

研究課題名（英文）Historical research on postwar labor society using ego-documentation

研究代表者

梅崎 修（Umezaki, Osamu）

法政大学・キャリアデザイン学部・教授

研究者番号：90366831

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、エゴ・ドキュメントを使って日本の労働社会に独自の労働者意識の特質を分析することであった。まず、資料整備としては、あるユニオン・リーダーの52年間の日記をデジタルデータ化した。また、そのリーダーの出身産別組織である全織同盟のオーラルヒストリーも実施した。近江絹糸人権争議の論文（「家族賃金」観念の形成過程：近江絹糸人権争議後の交渉を対象に）を掲載し、さらにその論文の改訂版を含む共著『日本の雇用システムをつくる：1945-1995 - オーラルヒストリーによる接近』を2023年に刊行した。本書は、学会の研究会で報告した。また、第38回沖永賞（労働問題リサーチセンター）を受賞した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

エゴ・ドキュメントを使った研究成果は、論文、書籍、研究会を通じて人物や群像から労働社会を分析するものであった。さらに、その研究成果については、書評や学会研究会によって様々な質問を受けることができた。エゴ・ドキュメントを使った人物分析という古くて新しい研究方法に対する関心と言えよう。実際、労働史の研究者の中で様々な議論を生み出すことができたと考える。この研究プロジェクトの延長線上に、社会政策学会大会において「『人物』から見た戦後労働史」というテーマ別分科会の企画が行われた。つまり、新しい研究枠組みとその方法について研究者たちの関心を集めることができたと考える。

研究成果の概要（英文）：This research project aimed to determine the unique characteristics of worker consciousness in the Japanese working class by analyzing ego-documents. First, as part of document preparation, we digitized the 52-year diary of a labor union leader. We also assessed the oral history of Zensen Domei, the industrial trade union with which the leader was affiliated. As part of this project, we published an academic paper examining the human rights strike at the Omi Kenshi Spinning Company, focusing on the development of the “family wage” concept. Additionally, a book co-authored by multiple individuals titled Creating a Japanese Employment System: 1945～1995 Approached through Oral History was published in 2023, which includes a revised version of the aforementioned paper. This book was presented at a research conference of the Society. In the same year, we received the 38th Okinaga Award (Labor Issues Research Center).

研究分野：労働史

キーワード：戦後日本労働史 伝記研究 オーラルヒストリー

1. 研究開始当初の背景

戦後日本労働社会の形成を分析した先行研究は多いが、そのほとんどは企業人事や労働組合が記した人事制度に関する文書や労使交渉などの決定文書を分析してきた。制度やルールの歴史的記述が行われてきたのである。本プロジェクトは、主に制度派経済学者によって行われてきた制度とルールの分厚い記述的研究を踏まえつつも、個人史からわかる事実にも関心を持ってきた。これまでも仕事や生活の経験史を踏まえて労働社会を捉える重要性も指摘されてきた。その理由は、制度設計や労使関係も労働者意識(形成)と一緒に把握する方が分析枠組みとしては説得的だったからである。実際、労働者意識や価値観が分析されることもあったが、まだ少ないと言える。個人の経験史という視点で、戦後労働社会の様々な側面を分析するには、実証のための歴史資料が不足していたと言えよう。それゆえ、エゴ・ドキュメントの収集と整理という歴史資料の再発見が求められていた。

2. 研究の目的

本研究は、日記や個人経験の語りの記録であるオーラルヒストリーを使って、戦後日本社会における、文化・余暇や家庭も含めた労働社会(=労働と生活)、「私事」を超えた領域での活動である「われわれ」の労働者意識について歴史的に把握しようとした。

第一に、エゴ・ドキュメント自体の議論、資料の収集が求められている。伝記研究は、歴史学においては伝統的な手法であるが、労働領域の歴史研究では、このような伝記的な研究の伝統は途切れている。その理由は、従来の労働領域の伝記や評伝は、ジャーナリズムの世界が主導してきたと言う歴史があるが、労働記者・作家が少なくなり、伝記・評伝は少なくなった。一方、歴史学では伝記・評伝の研究は多いが、社会科学領域では、個人史よりも制度研究の方が主流である。そこで、エゴ・ドキュメントを収集しつつ、その研究可能性を議論する必要がある。本プロジェクトでは、日記などの従来からのエゴ・ドキュメントに加えて、収集が続いている労働史オーラルヒストリーの作成、整理、紹介を行うことを目的とした。

第二に、エゴ・ドキュメントを使うことで新しい歴史研究を行うことを目的とした。特に、ジェンダー(恋愛・結婚)余暇・文化、労務管理・労使関係という3つの観点からエゴ・ドキュメントを検証し、研究目的である労働社会(=労働と生活)と労働者意識の把握を目指した。

3. 研究の方法

主に扱う歴史資料は、あるユニオン・リーダーの52年間の日記(中村日記,29冊)と中村が所属した全織同盟のオーラルヒストリーである。この資料を一般公開できるように整理しつつ、戦後労働社会の形成を読み解く。個人の経験史に焦点を当てることで、個人や集団がいかなる雇用システムをつくったという視点と、時代背景の影響を受けて個人や集団がいかなる意識や価値観を形成したのかという視点が生まれる。このような社会と個人の相互関係を読み解く労働史研究を行うことを目指した。

4. 研究成果

中村日記,29冊は、遺族が保管していた個人資料であるが、大阪のエル・ライブラリーの協力を得て、資料を寄託していただいていた。この資料のデジタル化を実施し、研究者間で読みやすい形にすることができた。この資料の読解は継続中である。

また、中村が所属していた全織同盟(現UAゼンセン)のオーラルヒストリーを実施した。高木剛氏、逢見直人氏のオーラルヒストリーは冊子化して資料として公開できた。最終年度に行ったユニオン・リーダーのオーラルヒストリーは、インタビューは終了し、現在冊子化にむけて編集集中である。このような日記と口述を組み合わせた分析ができる基礎ができた。

次に、近江絹糸人権争議の論文(「家族賃金」観念の形成過程:近江絹糸人権争議後の交渉を対象に)を改訂し、社会政策学会の学術誌に投稿し、掲載された。近江絹糸人権争議は、中村が所属し、労働組合活動を始めた頃の争議である。この論文は、賃金制度に関する労使交渉を対象にしながら、戦後の家族観の形成と企業内における人事制度の設計を関連付けることができた。労働組合運動の家族観として提示できたことは本プロジェクトの目的に沿ったものである。ただし、この論文で使った資料は、中村日記ではなく、中村も参加した近江絹糸人権争議に関わる個人文書(辻コレクション)である。辻コレクションも、エル・ライブラリーに保存され、我々が整理したものである(島西・梅崎・下久保・谷合・南雲(2014)「エル・ライブラリー所蔵の近江絹糸人権争議資料-辻コレクションについて」『大原社会問題研究雑誌』668)。

さらに、2023年4月には、梅崎修・南雲智映・島西智輝『日本的雇用システムをつくる 1945-1995-オーラルヒストリーによる接近』(東京大学出版会)を刊行した。特に、この書籍の第3章は、近江絹糸人権争議に関する論文「「家族賃金」観念の形成過程」『社会政策』11(3)を改訂したものである。

この共著では、副題にオーラルヒストリーによる接近とあるように、オーラルヒストリーというエゴ・ドキュメントを最大限に使った戦後労働史の研究である。補論には、「資料紹介 日本における労働史オーラルヒストリー」を載せた。日本における労働史オーラルヒストリーの蓄積を調べて、その研究可能性を議論した。エゴ・ドキュメントを使った労働史研究が増えることを期待して実施した。

この共著は、大原社会問題研究所月例研究会・社会政策学会労働史部会での報告、『朝日新聞』、『社会経済史学』、『日本労働研究雑誌』、『大原社会問題研究所雑誌』の書評欄で取り上げられ、議論を生み出したと言える。また、2024年3月には第38回(令和5年度)冲永賞を受賞した。さらに研究期間の後であるが、2024年5月の社会政策学会春季大会では、労働史部会のテーマ別分科会として、2023年度から研究を続けてきた「人物」からみた戦後労働運動史を企画し、報告した。

残された課題は、読解を続けている中村日記を論文の形にまとめることである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 梅崎修	4. 巻 2
2. 論文標題 企業の成長と人事制度の整備－京セラの60年を事例に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 稲盛和夫研究	6. 最初と最後の頁 68 - 89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.57273/inamori.2.1_69	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 梅崎修, 塚田俊彦	4. 巻 2
2. 論文標題 稲盛ライブラリーのオーラルヒストリーについて－保存資料の紹介	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 稲盛和夫研究	6. 最初と最後の頁 91-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.57273/inamori.2.1_91	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 梅崎修	4. 巻 5
2. 論文標題 オーラルヒストリーによるアートプロジェクトの可能性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 デジタルアーカイブ学会誌	6. 最初と最後の頁 232-235
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24506/jsda.5.4_232	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 梅崎修	4. 巻 11
2. 論文標題 「家族賃金」観念の形成過程：近江絹糸人権争議後の交渉を対象に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会政策	6. 最初と最後の頁 113-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 梅崎修・南雲智映・島西智輝
2. 発表標題 日本的雇用システムをつくる1945 - 1995
3. 学会等名 社会政策学会労働史部会研究会・大原社会問題研究所月例研究会（共催）（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 梅崎修
2. 発表標題 創造的回顧ふたたび：日本における人事労務研究の50年
3. 学会等名 日本労務学会大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 梅崎修・南雲智映・島西智輝	4. 発行年 2023年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 560
3. 書名 日本的雇用システムをつくる1945 - 1995	

1. 著者名 梅崎修、江夏幾多郎（共編著）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 中央経済社	5. 総ページ数 280
3. 書名 日本の人事労務研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	南雲 智映 (NAGUMO Chiaki)		
研究協力者	島西 智輝 (SHIMANISHI Tomoki)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関